

国会議事堂

東京都千代田区永田町

淡いピンク色の国産御影石を身に纏い、内部の壁、床、天井などに国内各地の大理石を散りばめた国会議事堂は、まるで石のジャム・セッションが繰り返されている空間のようだ。1920年の着工後、関東大震災に見舞われて設計図、模型などが消失し、完成まで17年を費やす難工事だったが、全国の選りすぐりの大理石が集まってくる現場は、石工たちによる活気あるセッションの舞台だったに違いない。

国会議事堂は「日本の石材博物館」ともいわれるほど国内の名石を一堂に集めている。外装には御影石、内装は大理石が使われていて、産地によって模様や色が違い、それぞれに名前(商品名)が付けられている。外装は尾立石(広島県)、黒髪石(山口県)、草水御影(新潟県)を採用。内装の大理石は種類も豊富で、琉球石(沖縄県)、答島(徳島県)、金雲(高知県)、金華(福岡県)、小桜(山口県)、青梅(東京都)など40種ほどにもなる。一番高いドームの下にある中央広間床には、十数種類の大理石を使った美しいモザイク模様が描かれていて、約100万個に砕かれた大理石が色別にはめ込まれている。

古代から繁栄の象徴とされている大理石は、建築石材としてパルテノン神殿やタージ・マハルなどに使われてきた。着工当時、輸入資材が増加していたが、国の威信をかけて大理石は国産の最高品質のものの方針が掲げられた。立法府の重要な空間は、選りすぐりの大理石と石工の優れた技術力を集結、今も荘厳で厳格な雰囲気を保ち続けている。



日本に議会が開設された1890年から46年間は仮議事堂が使われていた。仮議事堂は2度にわたる焼失の都度建て替えられ、時には日清戦争の影響で広島に築造されたこともあった。現在の議事堂の意匠設計は公募。1918年、大蔵省の臨時議院建築局が基本計画をつくり、翌1919年の1次、2次募集で4図案を選び1等から3等2席まで振り分けた。1等は宮内省技手の渡邊福三だったが、基本設計はこれら4図案を参考にして、臨時議院建築局が作成したという。SRC造地下1階地上3階建て延べ約53,000㎡。ドーム(中央塔)部は高さ65.45mで、1936年の竣工当時日本一の高さを誇っていた。

